

第2回会議以降に委員から寄せられたご意見

項目	該当箇所	ご発言内容
国立大学法人等への社会の期待	P18 2行目	・ SDGsは重要ではあるが、まず大学の本分である教育・研究に関して述べるべき。その上で地域やSDGsにも波及していくと考えるべき。
	P22 22行目	・ SDGsの要請でもある ダイバーシティをキーワードとして追加すべき。
全体構成	—	・ 「活動」と「基盤」の章が分けられているが、どちらも重要な内容であり、区別すべきではない。 ⇒分けるべきとの意見もあり、検討の結果、重要度の優劣ではなく、整理の観点から章を分けました。
	—	・ ICTIについては、基盤ではなく、教育研究の多様化・高度化に含めることで良い ⇒基盤の方がよいとの意見もあり、検討の結果、基盤に整理しました。
	P26 15行目	・ ICTに関しては防災とかその他と全く同じレベルで、基本的にベースとして考えるべき。ICTの環境は質の高いもの求められるが、整備費は非常に大きい。
	概要資料	・ ①教育研究の多様化・高度化、②学生や研究者等の多様化、③地域・社会との連携・協力の推進と3つの区分にきれいに分けられない。特に②のうち、国際化は教育研究の一部と考えられるし、リカレントは地域連携とも教育研究の多様化とも考えられる。①と③の2つの区分に整理する方が良いのではないか。
	概要資料	・ ①が大学の本分であるはずなのに、この整理の仕方だと教育研究は大学の活動の「一部」のように見える。大学の本分である教育研究が重要であることが分かるようにすべき。
概要資料	・ 7本柱と3つの方向性の対応が気になったが、3次元的に記載するなど実際はきっちりとは区別できるものではない。一方で、あまり決めすぎると大学側の自主性が発揮できない。	
イノベーション・commons	P20 24行目	・ ハードの整備を活かす人材の問題が非常に重要。アクティブ・ラーニング・スペースなどのスペースを作っても、そこにプログラムをうまく設定できる人材、そこでの活動を支援する人材がいなければうまく機能しない。
		・ 国立大学法人等がすべき事項について、施設整備を進めていくための体制強化も必要。現在の各大学での施設整備のプロセスでは、施設整備が行われる部署の研究者に個別に要望を聞くことがメインとなり、本当に実現すべき「共創」の拠点、交流、多様性を高めるといったことから離れている施設整備が多いのではないか。そういった点をウオッチして、指摘できる大学の体制が重要であるといった内容を記載してはどうか。
	・ ハイスペックな設備が必要というわけではなく、活動やそこで研究する人たち同士のコミュニケーションを誘発するようなスペースを作る。あるいはやっていることがよく見えるようにしつらえるとか、何かのときにはフレキシビリティが確保できるような施設を作ることが重要。それが研究にとって良い影響を及ぼす。	
P20 2行目 24行目	・ 新しい教育、新しい研究の中で要求される教育研究の場、「イノベーションcommons」はどうだろう。イノベーションでは1個の発見から基礎研究、応用研究、開発という流れをイメージされやすいが、実際はいろんな知識が合わさって発生している。いろんな知恵、知識がそこに集まって、学びの場にしてみたいし、ディスカッションの場にしてみたいし、リサーチの場にしてみたいし、それは各大学の創意工夫でいろんなイノベーションcommonsを作ってもらえばいい。大学の目的や得意分野などを踏まえて多様に考える。研究の高度化れと併せて、地域貢献にもつながっていく。	
・ 「イノベーションcommons」というのが教育から始まって、大学における研究組織、社会貢献は一つ一貫したものである中で位置付けるといふふうにしていくのは、教育研究と社会貢献等というのが、一つの大学のミッションでつながるといふような観点からも、非常に分かりやすい絵になる可能性がある。		

第2回会議以降に委員から寄せられたご意見

項目	該当箇所	ご発言内容
目標設定	P26 2行目	・ 現場はとにかく老朽化対策がニーズであり、それが達成できるようストーリーを考える必要がある。
		・ 現行5カ年計画の「重点整備目標〇万㎡」に相当する、象徴的な目標が何か、イメージをしながら取りまとめを行うべき。
		・ 「高度な共創空間」はどの大学でもあり得る施設の形。目標にはなりうると思う。一方で、一般的な老朽化対策を進めるための目標も必要。
	一律の目標は設定せず	・ すべての大学が最先端研究をやっているわけではなく、そういった大学では日本の優秀な企業がオープンラボ等を使うということは考えにくい。一律の体制で本当にいいのか。
・ アクティブラーニングスペースが現状で2700カ所とのことだが、十分に足りている印象。数をこれ以上増やすといっても「本当に必要なのか」という感想を持つ。もし数値目標を作るのなら、たとえば学部生、大学院生の定員分の席を整備するなど、人に着目した方がわかりやすいのでは。		
・ アクティブラーニングスペース〇箇所、オープンスペース〇箇所という目標だと、大学がとにかく「場所」を作るということになってしまう恐れ。スペースを作ることだけに執着されるようになるのは違和感。		
		・ 2040年に向けて、「量」よりも「質」への転換ではないか。
教育施設について	P21 28行目	・ 文系やリベラルアーツなどの分野は古い施設に追いやられがちだが、たとえば、熟議できる空間、アートな空間、デザイン思考をうながす空間などをあげてはどうか。
リカレント教育について	P24 27行目	・ リカレント教育の定義が曖昧。学術的な知見のアップデート、(たとえばプログラミングなど)スキルアップ、ビジネスの新たな概念やアイデアを得る、など切り口が様々で、「リカレント」の一言では整理しづらい。
	P25 17行目	・ リカレント教育の場は街中にある必要がある。
産業界との連携について	P25 8行目	・ 地元企業との関係では、大学と企業、お互いがお互いを知らない。地域連携プラットフォームのような「場」が必要。
	P25 2行目	・ 大学のキャンパス内に居場所がほしいという企業ニーズは多いのではないかと。「フューチャーセンター」が(個別企業から)中立的な立場にある「大学」の中にあれば、多様な業種の企業がコラボレーションしやすいのではないかと。
	P25 5行目	・ (大学を活用した社会実験について)大学だからこそ扱えるデータなどがある。それを活用できれば、大学と企業が組むメリットがある。
	P24 34行目	・ 最先端研究も同様だが、大学で研究し、社会に実装する際、高機能にし過ぎて使いにくい場合がある。それをもう一度大学で課題研究し、改良したものを再度社会実装するというサイクルが必要。産学連携はこれまでは自然科学分野が中心であったが、社会実装の観点から、人文系(社会学など)の参画が増えている。

第2回会議以降に委員から寄せられたご意見

項目	該当箇所	ご発言内容
地域との連携について	P24 4行目	<ul style="list-style-type: none"> 数年前に大学は3類型に分けられた。その「地域型」の大学が地域から評価されるようにという視点が重要。「地域型」大学の定義を引用してはどうか。地域との連携の仕方には、大学がある街としての地域文化醸成という考え方もある。海外では、大学がその「知」を活かして公開講座を催し、それを住民が楽しむ、学ぶといった文化ができているところがある。
	P24 14行目	<ul style="list-style-type: none"> 自治体の防災計画の中で拠点が決められているが、その中で新たな大学の位置付け、新たな役割を担うことはありえる。
		<ul style="list-style-type: none"> 比較的大学の数が少なければ協力体制が築きやすいが、東京都などでは非常にたくさんの大学・学校がありどのように協力体制を築いていくか難しい場合もある。
		<ul style="list-style-type: none"> 過去に大きな災害があった地域の大学に地方公共団体との連携等について情報収集をしてもいいのではないか。
	P24 20行目	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災の際は東北地方の大学に対して必要な支援物資を一旦東京大学に集積したり、熊本地震の際は九州大学で集積された。大学間ではそういった体制がある程度ある。
<ul style="list-style-type: none"> 防災拠点としての役割とあるが、巨大地震や風水害など災害の種類によって拠点として求められる機構が違う。大学には巨大地震後の復興の拠点といった要素もあるといい。通常は防災関連の研究等を行っているが、有事の際は拠点になるような形で連携を行っている場合もある。 		
<ul style="list-style-type: none"> 国立大学が防災面で協力できることと言えば、例えば、災害時の連絡拠点や物資の拠点など、ロジスティックスな部分であれば理解できる。 国立大学のネットワークであるSINETは阪神淡路大震災や東日本大震災時でも使えたと聞いている。ただ、災害時の指令場所がない。情報研究の施設を機能強化して防災指令場所にすることは考えられる。 		
世界に伍する最先端研究の推進	P22 16行目	<ul style="list-style-type: none"> 世界でも唯一となる様な最高水準の研究環境の中で、国内外の研究者コミュニティを横断的につなぎ、我が国の研究基盤の向上のために、広く最先端の研究機器を共有し、様々な分野の研究者が研究活動に従事し、分野融合的な研究を進める原動力となることで効果的に我が国全体の科学技術の底上げとなる。
		<ul style="list-style-type: none"> 科学技術政策や高等教育政策と連動した施設整いが重要
		<ul style="list-style-type: none"> 個々の大学では整備・運用が困難な卓越した学術研究基盤を保有する大学共同利用機関における、最先端の大型装置や貴重な学術資料・データ等を支える施設整備
附属病院	P23 1行目	<ul style="list-style-type: none"> 「災害に強い病院」は社会的なニーズが大きい。(非常時の病院同士の)医療ネットワークもあるが、(患者情報の共有には)SINETも活用できるのではないか。
		<ul style="list-style-type: none"> 医療従事者の職場環境の改善も重要。良い職場環境が安全安心な医療につながる。
		<ul style="list-style-type: none"> 大学病院には地域の病院と連携した膨大な患者データがある。超高齢化社会の日本しか高齢患者のビックデータは持っていない。これは大きな強み(産業界にとっても非常に価値が高い)。
学生・留学生寮	P22 29行目	<ul style="list-style-type: none"> 海外大学に見られるカレッジ制度は、先輩が後輩を教える、24時間勉強ができる、ダイニングを共にすることでマナーが養われるなどの良さがあり、世界的なトップ大学となっている理由のひとつではないか。